アハバ-ル・カシオン

JICA シリア事務所
2005 年 3 月 1 日
第 61 号

★★　3 月・4 月の予定　★★

【事務所休日】
3 月 8 日　革命独立記念日
3 月 21 日　母の日
3 月 27 日　イースター（カソリック）
4 月 17 日　独立記念日
4 月 20 日　預言者生誕祭

【会議等】
3 月 3 日(木)専門家活動報告会(16 時)
3 月 17 日(木)ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動報告会（16 時）
4 月 7 日(木)専門家活動報告会(16 時)
4 月 21 日(木)ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動報告会（16 時）

【調査団等】
1 月 27 日～3 月 3 日　リプロダクティブヘルス強化プロジェクト事前評価調査団
2 月 5 日～3 月 3 日　プロジェクト形成調査団（教育分野）
2 月 19 日～3 月 3 日　ジャンダール電力技術研修所建設計画フォローアップ調査団
2 月 25 日～3 月 4 日　地方都市廃棄物処理機材整備計画
3 月 11 日～17 日　ダマスカス送水トンネル改修計画

【専門家・ボランティアの動き】
【着任】よろしくお願いします。
4 月 5 日　青年海外協力隊 11 名予定
4 月 6 日　シニア海外ボランティア 3 名予定

【帰任】お疲れ様でした。
3 月 21 日　片山克己専門家
4 月 1 日　シニア海外ボランティア 7 名
　村田洋一郎、伊藤康広、渡邊國男、
　島田寛三、辻誠、仁尾正人、浅井真樹
4 月 6 日　青年海外協力隊員 5 名
　浅沼愛子、馬杉翠、船木克也、
　五十嵐景子、関根令子

【一時帰国】
3 月 12 日～4 月 14 日　得津隆一 SV

【健康管理】
3 月 18 日～4 月 5 日　長嶋正明 SV
4 月 21 日～5 月 19 日　日永田晴美 SV

【所員の動き】
【離任】
3 月 30 日　木川浩史調整員
3 月 30 日　武市直己企画調査員

●活動報告

ヨルダン出張記

森　範行専門家（ﾁｰﾌｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ）
灌漑省水資源情報センタープロジェクト

1．目的と概要

当ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでは１月３１日から２月２日までの２泊３日の行程で、隣国ヨルダンの水灌漑省などを訪問しました。現在当ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでは、シリアにおける全部で７つの流域のうち、２つの流域（ダマスカスを中心とするバラダ・アワジ流域、ラタキア及びタルトゥースを中心とする沿岸部流域）を対象として、気象・水文情報を収集、蓄積、分析する水資源情報センターの整備を行っていますが、ヨルダンでも 1980 年代の終わりから USAID、UNDP、GTZ などの支援によりこのような水資源関係のデータベースシステムの構築を進めてきています。このような近隣国における類似先例を視察し、今後のﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ活動の参考とすることを主な目的として今回の出張を行いました。

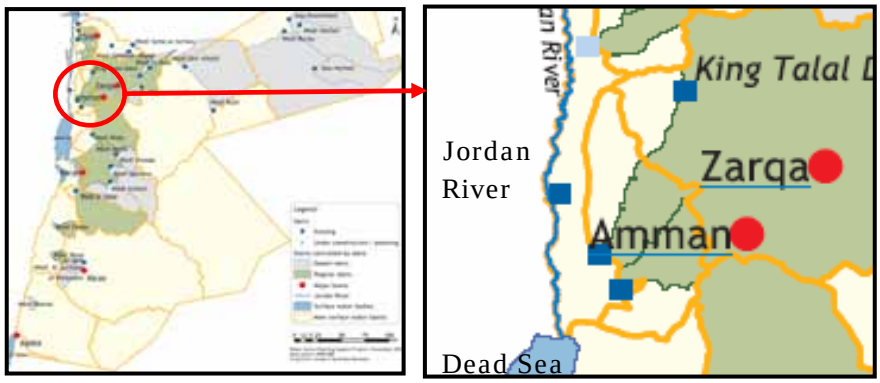
参加者は、日本人専門家４名（森、杉浦、鈴木、實松の各氏）およびシリア側C/P４名の計８名で、レンタカー２台により陸路で Amman へと向かいました。

2．主な視察箇所の状況

2.1　ヨルダン水灌漑省

水灌漑省では主に、水資源情報システムおよび水資源マスタープランの策定等についてヒアリングを行いました。前述の通り、ヨルダンの水資源情報システムの構築は１９８８年頃から開始され、USAID、UNDP、JICA など様々なドナーが関与しつつ、最終的にドイツの GTZ がデータベースの整理とそれに基づく様々な意思決定システムの構築が行われてきました。本ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ全体のとりまとめ担当 Director である Mr.Edward は、既存データの収集整理に相当の時間が費やされたことと、データの信頼性を高めるためのチェックの重要性を強調していたのが印象的でした。データの具体的なチェック方法について質問したところ、基本的には担当職員が実際のデータを目で見て、異常値と思われる値が見つかった場合には、現場の観測担当者や入力担当者に確認（誤操作、誤作動、入力ミスなど）を行っているとのことでした。

とかくシリアの C/P は、日本で導入されているような閾値や近隣観測所間の相関関係等による自動チェックシステムのように、一見スマートで格好の良いものにすぐに飛びつく傾向がありますが、そのようなシステムは相当長期間にわたる良質なデータの蓄積があってこそ機能するものです。やはりまずは観測データの



今回の視察エリア

意味を理解し、おかしなデータを目にしたときに直感の働くスタッフ養成が重要であると感じました。

その後、情報システム担当Directorである Ms.Susan と会い、水マスタープランの策定についてヒアリングを行いました。水マスタープランは、前述のデータベースシステムを活用して策定されたもので、体裁、内容ともに非常に洗練されたものとなっています。(策定作業は、ドイツのコンサルタントが実施したと思われる。) 前回 2003 年に策定されており、その後の最新のデータを踏まえて改定作業を予定していますが、この作業に関しては、再度GTZの支援を要請しているとのことでした。(つまりまだ自力で改定できるほど、使いこなせてはいない？)

また今回の水灌漑省訪問で驚いたのは、省庁の建物が非常にきれいかつ清潔であったことです。エレベータにドアがある(シリア灌漑省のエレベータはドアが無い) のはもちろんのこと、各 Director のオフィスには床に高級感のあるカーペットが敷かれ非常に快適でした。またヨルダン水灌漑省に派遣されている日本人専門家の話では、Director クラスになると月給 1000 ﾃﾞｨﾅｰﾙ (約 15 万円) ぐらいもらっているとのことです。シリア灌漑省における Director の月給が大体 2～3 万円程度ですので、シリア・ヨルダンの物価差を考慮してもかなりの違いがあるのではないかと思われます。やはりシリアでも職員の意欲を高めるためにはこうした待遇や職務環境の改善も必要でしょう。

2.2 ヨルダン川流域視察

2 日目は、主にヨルダン川流域の水関連施設を視察しました。まず向かったのは Zai 浄水場です。本浄水場は Amman 上水道水の主要な水供給施設となっています。水源はヨルダン川およびその上流の King-Talal ダムですが、ヨルダン川の標高がマイナス 240m なのに対して、本浄水場は標高約 900m の地点にあるため、1000m 以上の高低差を 4 つのポンプで中継しながら汲み上げています。Amman は水源に乏しいと聞いていましたが、実に 1000m ものポンプアップが必要であるというのはいかに状況が深刻であるかが伺われます。この浄水場のｺﾝﾄﾛｰﾙｼｽﾃﾑ等の機材は日本の無償資金協力により導入されていますが、現在、事業運営そのものはフランスの LEMA 社が実施しています。

Ms.Suzan(赤髪の女性)の執務室にて説明

その後、Zai 浄水場からヨルダン川へ降りてゆきましたが、標高 900m から一気にマイナス 240m まで下るため、途中の道路は激しい急勾配となっています。この坂道を下ると、ヨルダン川の東岸に到着します。さすがにここまで標高が下がると風も温かく感じられ、周囲にはビニールハウスやバナナ畑まで見ることができます。このヨルダン川東岸では、ヨルダン川に並行して King Abdulah Canal(KAC)が南北に縦断しこの地域の灌漑用水を賄っています。KAC の管理は、中央管理センターによって一元的になされており、水位、流量、貯水量等のデータをリアルタイムで把握しています。また水資源管理をより合理化･効率化するため、将来的には KAC に数多くある堰等を、中央管理ｾﾝﾀｰからリモートコントロールするシステムの導入も考えているとのことでした。

その後ヨルダン川沿いを南下し、海抜下約 400m (世界最低地点) の死海に到達しました。私の死海の第一印象は、とにかく「殺風景」なところということです。ヨルダンでは有数のリゾート地の一つと聞いていたので、どんなところだろうと思っていたのですが、正直に言って特段の感動はありません。ごく部分的に 3 軒ほどの超高級ホテルが軒を連ねる一角がありましたが、ここはやはりそのようなホテルに泊まって浮かんだりしないと楽しくないようです。残念ながら JICA 関係者は現在ヨルダンへの私用での渡航が禁止されていますが、早くこの措置が解除されて、その素晴らしさを再度発見できる機会があることを祈るばかりです。

死海にて

2.3 As-Samra 下水処理場視察 (Zarqa)

As-Samra 下水処理場は Amman 近郊都市 Zarqa にあり、Amman などからの生活排水を受け入れて処理を行っています。しかし昨今の Amman の人口急増から、既存の施設 (設計処理能力 68,000㎥/日) に対して実際の下水流入量は 170,000m3/日と過負荷状態となっており、所要の処理滞留時間を確保することができず、「半生」状態の処理水を河川に放流しています。その処理水質は BOD 値 600ppm と、にわかには信じがたい数字となっています(ちなみに日本の下水放流水質基準は BOD 値 15ppm)。しかもその放流水は下流にある King Talal ダム、KAC へと順次流れ込み、KAC から Zai 浄水場に汲み上げられてまた Amman に上水として供給されるという、恐るべき水循環が形成されています。

処理後の放流水 (BOD600!)

そのため水灌漑省は現在、既存処理場に隣接して、新たな処理場の建設を行っています。この新処理場には、Private Finance Initiative (PFI) が導入されており、Building, Operation and Transfer (BOT) 方式による 25 年間のﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ運営契約をヨルダン政府と国際企業団とが結んで実施しています。国際企業団の代表はフランスの Suez 社ですが、Suez 社は同じフランスの

Vivendi 社とともに、世界各国でこのような上下水道関係の民営化ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄを請け負っており、一説にはこの２社だけでこの分野おける世界シェアの７割を独占しているとも言われています。ここヨルダンでも、Zai 浄水場の LEMA 社も含め、フランス水企業の食い込みの深さを目の当たりにした思いでした。新処理場は 2006 年末までに竣工予定とのことですが、また竣工後の状況も見てみたいものです。

３．終わりに

今回の出張では隣国ヨルダンの水情報システムを中心に、水関係ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄを視察することができ、今後の参考となる部分が多かったと思います。今回の出張に際し、様々なサポートとアレンジをしていただいたヨルダン国水灌漑省、JICA ヨルダン事務所、JICA シリア事務所の関係者の方々に感謝いたします。

● 活動報告

ジャンダール研修所赴任３ヶ月

日永田晴美（SV）
火力発電：ｼﾞｬﾝﾀﾞｰﾙ電力技術研修所

指導中の日永田 SV

シリア国ダマスカスに 2004 年 10 月 20 日に到着した。思えば 2004 年 4 月に応募を決めてから半年で赴任地シリア国に来てしまった。ダマスカス空港の熱風と乾燥した空気が思い出される。ここシリア国はもっと保守的で男性の国と思っていたが、ヨーロッパの都市と変わらない商店が並び、若い女性が闊歩しているのを見て、開けていると思った。到着したのがラマダン中だったので、これには異文化を感じた。お昼の店が開いていない。午後 4 時から 5 時にかけて、あれだけ混んでいた車が街から姿を消してしまう。あれだけ多くの人が歩いていた街から人が消える。これには驚きだった。

11 月中頃までのアラビア語の研修を受けた。言葉にフスハとアミーエがあることも聞いた。これは日本語の標準語と方言のようなものであろうと想像した。アミーエは書き言葉で表さないとのことであった。ここで使っている数字がアラビヤ数字でない。これには学校時代に習った表し方が適切でないのでないかと今ごろ（60 歳を昔通り過ぎた）気がついた。

11 月中旬に無事アラビヤ語の研修を終えて、（挨拶のｻﾊﾞﾊﾙﾍｰﾙ、ｻﾊﾞﾊﾙﾇｰﾙだけ覚えて）ホムスに移動した。そこでカウンターパートと呼ばれる女性に紹介された。臨月間近のきれいな女性であった。しかも暫く休暇に入るとのことであった。わし一体どうなるの？心配ご無用。研修所は後任のカウンターパートを指名した。1m90cm はありそうな煙突みたいな男であった。都合よく頭のてっぺんは、風通しがよくなっていた。お互い片言の英語で意思の疎通が上手く行かない。こちらの思っていることが通じていない。仕方が無いので時間をかけることにした。

指導科目の「火力発電」には内心不安だった。それは広範囲な技術が必要で、しかも最新鋭の発電所の技術である。一市民が持てる技術でない。来るなり運転にかかる取扱説明書をもってきたか？「それで講習をしてくれ」と言われた。冷蔵庫の取扱説明とは違うのだ。発電所には 1000 台以上の電動機があり、それだけの数の機械があり、動かす電気計装があって運転されているのだ。半端な技術じゃあ無いのだ。そんなものをわしが持っている訳無いだろう。世界に数社しかないトッププラントメーカのトップシークレットの技術だ。

カウンターパートと通じない言葉で根気良く何回も聞いていると少しずつ分かってきた。日本の援助もあり最新鋭の発電所が幾つも稼動しており、それを支障なく運転しているのだ。最新鋭の発電所を運転する技術がこの国に存在するのだ。彼らも運転に関

カウンターパートと研修生達

するテキストを作ることに不自由は無いと言う。しからばわしは何をするの？幾つかの発電所を回って分かったことは、プラントメーカの努力があって運転技術は持っている。しかし何故そうなのか。理論的な説明が欲しいとの声が多かった。研修所で何が不足して、何をして欲しいのか目的を、はっきり言って欲しいと思った。先輩 SV の話しを聞くとそんなのここでは無理よと一笑されてしまった。これが発電所を回ることにより解決した。

兎に角、彼らの意図が少しずつ分かってきたような気がしたので、機械を理論的に説明して、何故そのような運転をするかを組み合わせて、レクチャー形式で進めていくことに決めた。レクチャーすることによりカウンターパートのポテンシャルが上がって、研修生に対し、より高度な運転技術を指導できたら良いと考えた。このレクチャーの中で、新たに彼らの意思が出てくることを期待して、出来るだけ彼らの意思に応えるように自分も努力してゆきたいと考えている。

● シリーズ：北澤プロジェクト　その４

北澤豪フォトギャラリー　in　SYRIA

シリア事務所

第１回　JICA - CUP

全試合ジャッジしてくれたシリア国際審判団

サッカー教室

ハーフタイムの様子

ハマチームを応援するハマが任地の隊員

表彰式での北澤氏

閉会式前のマスゲーム

大会後優勝ﾁｰﾑを訪問した北澤氏(右 松崎隊員)

空港でプロジェクトチームとラストショット

ラクダに乗る北澤氏（TV で北澤氏を見た事があるということで無料になった）

JICA 活動現場視察中の北澤氏

障害児にサッカーを教える(左 瀧本専門家)

真剣に説明を聞く北澤氏（WRIC にて）

子供達とﾊﾟｽﾞﾙをする北澤氏(左 吉田隊員)

北澤豪 JICA オフィシャルサポーター、ありがとうございました。

We are on the WEB. See us on www.jica.go.jp, www.jicasr.org

お知らせ

本ニュースレター配信ご希望の方は当事務所まで氏名、メールアドレス、JICA との関係（所属）を連絡願います。

編集後記

2 月中旬～下旬にかけ北澤氏と同時期に、調査団訪問が 3 件あり事務所はフル回転でした。北澤プロジェクトが無事成功したのもプロジェクトチームの努力の賜物でした。皆様お疲れ様でした。次はリベンジマッチですね。（S.I）